

煩惱をすてずに（その三）

イエス・キリストの苦悩



超在的イエスと、その人間的苦悩の矛盾

日 高 白 象

これまで「煩惱をすてずに」という題名のもとに、釈尊と日蓮聖人の懺悔について述べ、超人的絶対者として仰がれていた仏陀釈尊にして、静かな深い人間的懺悔が、その生涯をつらぬいていたという事実、或いは、上行菩薩の再誕として仰がれていた日蓮聖人にして、沸騰するような人間的慟哭懺悔が、聖人の布教の姿勢にまでも及んでいたという事実をふりかえり、そこにあらわれてきている絶対矛盾した超人性と人間性を、どのように融和統一すべきであるか、という解決に迫られていたのですが、これに関連して思い起こされる

ことは、釈尊や日蓮聖人と共に世界的聖者と仰がれているイエス・キリストにしても、「神の子」という超人的存在でありながら、その反面、人間的な内省苦悩と必死に戦われていたという、超人性と人間性との、全く矛盾した事実があった、という事です。

もとより仏教は「絶対無」の立場、キリスト教は「相対有」の立場であって、教学上でも根本的に相違しており、まして「煩惱をすてずに」というテーマの中に、イエス・キリストを引用するのでは、たとえば水の中に油をそそぐようなもので

あるかもしれません。

然し、イエスの矛盾的人間像をふりかえることは、釈尊や日蓮聖人における、超人性と人間性の矛盾解決に対して、もとより直接参考に資するには足らなくとも、宗教の如何をとわず、世界の聖者ともなれば、そこに共通した人間的矛盾がある、ということに考えさせられるものもありました。ようし、またそれによって、我々の信仰の在り方について示唆されるところも見出されるかもしれないという、そういう意味から、少々脇道へそれる恐れもありますが、イエスのこの両極的矛盾に触れてみたい、と思うのです。

さて、歴史上の人物を述べた伝記の中でも、イエス・キリストに関する伝記ほど歴大なものはないとされています。そしてその数は、全世界におけるおよそ九億五千万人というキリスト教徒の数にも対照され、現在千二百語の言語に翻訳されている聖書が、常に世界のベスト・セラーを占めているという事実にも照応される、といわれています。

す。

ところが面白いことには、それらイエスの伝記が、ほとんど一様ではなく、筆者によって千差万別のイエス像が描き出されているということです。中には歴史的事実を否定したイエス抹殺論もあります。このように多種多様なイエス像の描かれるにいたった理由として、実に神の子であると同時に人の子であったという、イエス自身の矛盾した両極性があげられています。この両極性が、キリスト教神学発展の母体となってきた、ともみなされているほどです。

然し、イエスが、生まれながらにして天地創造・全智全能なる神より、地上へ遣わされた神の独り子であり、救済主メシヤであるという、その超人的神格を立証するため、やれ処女より生まれたものであるとか、死後三日にして死体が復活したとか、或いは伝道三カ年間において、イエスの現した数々の神秘・奇跡といったことを、如何に強調してみたところで、聖書の中に点在するイエ

スの戦慄するような内省的苦悩というものを、抹殺することは到底不可能なことと思われるのです。

たとえば、モーゼがエルサレムの民をひきいてエジプトを脱出したことを記念した一月十四日の過越（すぎこし）の祭りの夜半、エルサレムの郊外なるゲツセマネの園において、弟子のユダの密告によつて捕らえられたイエスが、翌朝九時、人類の罪を一身に背負つて、ゴルゴタの丘の上に立てられた十字架の上の人となつてより、六時間も過ぎた午後の三時、まさに息たえなんとする寸前、

「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」

我が神、我が神、何ぞ我れを見捨て給いし

と絶叫しているのですが、これが神より遣わされた神の子メシヤたる者の、臨終いまはの声ともいわるべきでしょうか。人類の罪を背負つて十字架についたはずのイエスにして、絶叫した刹那においても、なお神の子の自覚にあつたといわるべきでしょうか。それとも神の子なればこそ、子の絶叫があつたとみるべきものでしょうか。

時にイエスは、まだ三十三才という若さでした。青年宗教家イエスのこの声に、超人的な神の子というよりも、むしろ人間としての懊悩・悲愁・孤独・焦燥・絶望をへた諦観といったような、我々凡夫に近いもの、いや我々よりも、もつともっと深い人間性というものを、看取することは出来なんでしょうか。

パスカルは、

「イエスは神であると同時に人間であり、この矛盾統一の中にこそ、イエスの本質がある」

と述べていますが、神の子イエスにして、かかる人間的絶叫があつたと受けとるところに、赤裸々なイエスの真実にふれることが出来る、とはいえないでしょうか。

イエスの神の子たる自覚は、ヨルダン川の流れの中で、バプテスマのヨハネより洗礼を受け、川より岸へ上がった刹那に起こつたものでした。その時イエスは、神の聖霊が鳩となつて、イエスの胸の中に飛び込んで来たのを観念的にでなく、全

身の血管が急激に膨張するような、強い実感として受けとつていきます。鳩とは、神の愛と和を象徴するものであり、鳩が胸の中に入るとは、神の愛をうけ、神に召されて、神の使命が托されたことを意味するものである、といわれています。

蓋し神の子たることは、神と同じ心、同じ本質をもつということであり、神の理想に生き、神の使命を果たすということでした。それは、或いは法華経でいう「授記作仏」に通ずるものと言われないことはありません。但し法華経にあつては、授記の後における菩薩道の実践が示されており、その実践の当処、仏陀と共に仏道を成ずる、ということが明らかにされています。

然しイエスの場合、そうした具体的な修証の道というものはありませんでした。このため、ひとたび契示として受けとめた神の子たることの確証を求めて、四十日・四十夜にわたる曠野の苦行が実行されるに至ったのです。

それは、孤独と飢えと寒さとの戦いでした。そ

れにもまして悪魔の誘惑との戦いでした。

「汝、もし神の子であるならば……」

と悪魔サタンは、飢えたるイエスに向かって、石をパンに変える奇蹟をすすめました。

「人の生くるは、パンのみによるにあらず」

これがイエスの答えでした。更に悪魔は、高い断崖より深い谷底へ、飛び降りる神業を示すよういざないました。

「神を試すことなかれ」

イエスは神の子たることの確証を、神通・奇蹟といった神秘的現象に求めず、魂において、神と父子の契りをおぼわした愛そのものに求めたのです。愛の契り、それがすべてでした。様々な奇蹟的現象は、むしろ神の子たる者のなし得た行為的结果にすぎないものであり、たとい奇蹟をあらわさなくても、神の子たる確証をそこなうものでなくイエスの奇蹟的出生や、死後の復活といった奇蹟といえども、その確証となすに足りるものではなかったのです。

かくて曠野のイエスは、一切を放棄し、おのれ

の命をかえりみない決死的祈りの中に、ヨルダン川の契示を寄りどころとして、神の愛に生きる自分という立場より、自分を生かす神の愛という立場へ、百八十度の大転換をとげ、その根源的愛の当処に、神の子たることの証を確かめることが出来たのです。

これよりイエスのガリラヤ地方における、バプテスマのヨハネのあとを引きついで果敢な福音伝道が展開されるのですが、イエスの生涯、死の瞬間に至るまで、イエスの内観的立場となったものは、曠野における

「汝、もし神の子ならば……」

という悪魔サタンの誘惑に替わる、イエスみずからの、

「我れ、神の子ならば……」

という責任感と使命感でした。ところが此の立場が、ゲッセマネの園において、イエスをして戦慄せしめるような恐怖へ追いこんでいるのです。

ゲッセマネの園とは、エルサレムの門を出てオリブ山へ向かう途中、道路に面した奥深い静かなオリブの園でした。

イエスは、過越の夜、最後の晚餐をすませて、ここまで到った時、圧え難き衝動から独りで祈るため、弟子達を園の入口に待たせ、ペテロとヤコブとヨハネの三人だけを従えて、園の奥へと入って行きました。

この時、突如として身震いするような驚愕と、鳥肌の立つような激しい戦慄に襲われ、荒涼たる寂寥と悲愁の風が、心の底を吹きはらい、その場に失心卒倒するばかりでした。堪えかねたイエスは、三人の弟子に対して、

「我が心、痛く憂いて死ぬばかりなり。汝等ここに留まりて、目を覚ましおれ」

と言っているほどです。そして、ひとりよめくように、更に園の奥へと進み、地にひれ伏し、腸をしぼって祈った言葉は、

「若しも得べくば、この時の、我れより過ぎ行かんことを！」

「我が父よ、父には能わぬことなし、この酒杯を我れより取り去り給え。されど、我が意のままを成さんとするにあらず。父の御意のままをなし給え」

ということであつたのです。

ここにいう「この時」とは、敵に捕らえられて十字架につけられる最後の時のことであり、「この酒杯」というのも、受難の死の苦杯にほかならぬものでした。

もとより受難と死は、神の都エルサレムに乗り込む以前より、既に予期し覚悟していたところでした。またその覚悟なればこそ、獅子王の如くエルサレムに乗り込み、獅子王の如く神に敵する者を破折したのです。ために寺院の祭司・長老連の怨みを受け、捕縛・死罪の難が迫り、過越の夜の晩餐も、ひそかに人目を忍ぶ宴となつたのです。

その席上、食卓を囲む十二人の弟子に対してイエスは静かな深い愛と悲しみをたたえながら、「まことに汝等に告ぐ、我れと共に食する汝等の中の一人、我れを売らん」

と告げ、みずからパンを割き与えては、

「取れ、これは我が体なり」

といい、葡萄酒を汲み分けては、

「これは契約の我が血、多くの人のために流すところものなり。まことに汝等に告ぐ、神の国にて新しきものを飲む日まで、我れ葡萄の実より成れりものを飲まじ」

と暗に、ユダの密告によつて、我が体はパンの如くに割かれ、我が血は葡萄酒の如くに流れ、ために此の食事が最後の晩餐となり、告別の宴となることを告げているのです。

更に、此の晩餐を終え、エルサレムの門を出てオリブ山へ向かう途中、まだゲッセマネの園にとどかぬ道すがら、受難に際して弟子達の動揺を預期していたイエスは、

「汝、皆つまずかん……」

と告げ、ペテロの、

「たとい皆つまずくとも、我れは然らじ」

という答えに、

「まことに汝に告ぐ、今日この夜、鶏ふたたび鳴

く前に、汝みたび我れを否むべし」

と、受難の時が、既に今夜に迫っていることまでも予言されていたのです。この予言は、その後間もなく事実となつてあらわれて来ているのですが、それにしても、かくまで受難の死を予期し覚悟していたイエスが、何故、ゲッセマネの園の中において、突如、死ぬほどの驚愕・戦慄・寂寥・悲愁といった苦悩に襲われたのでしょうか。

かねて予期していたこととはいいながら、無気味な死の影が、冬の日の、暗い冷たい夜気と共に、肌に取り全身をおおつたためと言うならば、確かにそういう雰囲気もあつたことでしょうか、いざ死に直面して、かくも畏怖するとは何としたことでしょうか。悪魔サタンの試みなるか、イエス自身の迷いなるか、この苦しみは一体どこから起きて来たのか、当処、イエス自身にも計り難いことであつたかもしれません。

その故イエスは、父なる神に対して、眼前の迫つた死の時が、そのまま自分の前を通りすごして

行くように、死のにがき酒杯を手にしない中に、それが速やかに取り除かれるように、と神の膝を揺り動かさんばかりに祈つたのです。

然し、神は微動だにもせず、何の応答もありませんでした。イエスは孤独・焦燥の苦悩に打ちひしがれんばかりでした。弟子のところへ戻つてみれば、三人とも前後不覚、深い眠りに落ちていました。イエスは再び元のところに戻り、地に伏して神に祈り、神に訴えました。然し神は沈黙を守つたままでした。

神の沈黙……それは一体何を意味するものであつたのでしょうか。イエスを救うとも言わず、見棄てるとも言わぬ神の沈黙……神が愛のすべてであるならば、この沈黙も愛の沈黙といわるべきものなのでしょうか。それとも沈黙につつまれた神の御心は、既にイエスを避けようとしていたのでしょうか。

イエスは神の理想をかかげ、神の使命を果たさんとする、かけがえない神の独り子でした、そ

の故に、イエスを見棄てることは、神みずからイエスとの愛の契約を破り、神の理想と経論を放棄することであり、畢竟、神みずから神の資格を失うことにほかならないことでした。

若し神が、イエスの難を救うというのであれば、イエスの必死の願いをききいれて、時を移さず神の経論する方向へ、速かにイエスを導いて行かねばならないはずです。然るに此の固き沈黙は、一体どうしたことなのでしょう。神は何をためらっているのでしょうか。

苦悩に悶絶するばかりのイエスが、再び弟子のもとへ到った時、なおも三人は正体なく眠り耽っていました。頼むべき神は語らず、愛すべき弟子は眠り、しかもイエスを捕らえて処刑せんとする敵の羅卒は、剣と槍を擬して、密告者ユダを先頭にゲッセマネの園へ迫らんとしていました。

天と地の間、イエスは文字通り孤独なる神の独り子でした。イエスの亡き後、福音伝道を托すべき十二人の弟子の中の、一人は裏切つて、奴隷一

人分の代価である銀三十枚で、イエスを敵に売り、つい先刻、イエスと生死を共にすると誓ったばかりの、他の弟子達を代表した三人の者さえイエスのそばにかしきながら、しかもイエスの危機も苦悩も知らずに、疲労のためとはいえ、豚の如く眠りこけているのです。

この悲しき現実の姿に、人間の罪の悔い改めることの至難さが、露呈されていました。おそらくイエスは、この時ほど人類救済の至難さ、神の国の建設の至難さを、痛いほど思い知らされたことはなかったことでしょう。

三たび孤独の座にひれ伏したイエスの祈るは、もはや、神の子なるが故に、神の経論を成就せしめんがため、神によって死の難よりまぬがねばならないという立場ではなく、神の子として、かくまでも悔い改め難き人類を、如何にすれば救済へ導くことが出来るか、という立場に立っていました。

人を救うためには、自分が生きておらねばなら

ないということではなく、自分の生死にかかわらず人を救うことを先決とし、そのためならば自分の命は、どうなってもかまわない、もとより神に捧げた命なのだからという、いわゆる仏教の菩薩的立場に立っていたのです。これはイエスにとって「曠野の確認」につぐ「第二の回心」ともいわれるべきものでありましょう。

今やイエスの取るべき道は、不動のものとなっていました。それは受難を脱れることでもなければ、受難に引かれて死につくのもなく、むしろ受難を迎い容れて死につくことでした。イエスを捕縛し処刑することが、人間の罪のあらわれである以上、罪を罪とも知らぬ人々をはじめ、人類一切の罪を十字架として背負い、その十字架に釘と血で固くつながれ、死によって十字架上に人類の罪を贖（あがな）い、この贖罪（しよくざい）を媒介として、かくも悔い改め難き人類を、神の恩寵に浴びせしめること、ただ一つの道であり、神の子としてなすべきすべてを完了することであっ

たのです。

もとより神は既に、そのことを知っていました。神の経論を成就するため、神の子を十字架にかけねばならなかった神としては、それをイエスに告げるに忍びず、むしろイエス自身に悟らしめねばならぬことでした。その故、神は敢えて語らず、固く沈黙を守っていたのです。即ち神の愛は沈黙の壁の中につつまれていたのではなく、敢えて語らざる沈黙そのものが、限りなき神の愛のすべてを如実にあらわしていたのです。

祈りを終えて、三たび弟子のもとへ帰ってきたイエスの心は、もはや驚愕も戦慄もなく、孤独・寂寥・悲愁といった苦悩の影さえもありませんでした。それは嵐の夜があけて、さし昇る朝日のように清々しい姿でした。

イエスが捕らえられたのは、その後まもない、このゲッセマネの園の中でのことでしたが、この園の中におけるイエスの苦悩は、神の子としての自覚に動揺したのではなく、あくまでも「我れ、

神の子ならば……」という立場に立っていないながらその責任と使命を遂行する上において、ともすれば落ち入りやすい「自分こそは」とか「自分がいなければ」という自己過信から、死の回避を願ったところに起こったものであり、その場合、神の愛は沈黙の彼方にしかなかったのです。

ところが、同じ立場にありながら、そうした我れをすてて、みずから死を受け容れたところに、苦悩よりの解放が起こり、神の沈黙が愛そのものとしてイエスの全身にふりそがれたのです。

ゴルゴタの丘の十字架上において、
「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ……我が神、我が神、何ぞ我れを見捨て給いし」

と絶叫したのも、神は何故に我れを見棄てられたのか、という自分の苦痛を中心とした哀惜ではなく、見棄てざるをえなくせしめられて見棄てなければならなかった神の心、「何故に」というならば、ただひたすらに人類のかたくなる罪を贖わしめんがためであり、永遠に人類を愛し、こと

さらに神の子イエスを愛しぬかれた神の心を中心として、その切なくも限りなき大いなる神の愛を死の一時に至るまで、最後の息をふりしぼり、文字通り全身全霊をあげて讚美讚嘆せざるを得なかった言葉、と理解することは出来ないでしょうか。

神を讚美讚嘆する言葉として「何ぞ我れを見捨て給いし」というのは、一見、理解に苦しまざるを得ないところですが、それは勿論文字通りの意味ではなく、また神の救済を讃えた反語的表現でもなく、人類の贖罪を背景として、見棄てざるを得なかった神と、見棄てられざるを得なかった神の子イエスとの、父子一体なる愛の契りが、イエスの死の瞬間において完結されたことを意味するが故に、イエスの立場において、このように表現されたもの、ということはお出来ないでしょうか。

またこのように理解することによって、イエスの人間的苦悩が、神の子たることの權威をそこなうものでなく、むしろその尊さを深めるものと見ることが出来、イエスの両極的・二面性の矛盾も、

ここに解決されそうにも思えるのです。

然し、ここに問題として残るのは、以上のような思索における、イエスの神の子たることは、超自然的なものというよりも、むしろ歴史的なイエスの内面的な自覚を主としたものであり、従って神の愛も、どちらかといえば内観的なものとして取り扱われているということです。こうした解釈の仕方を押し進めて行くならば、おそらくキリスト教は仏教的性格をもったものとなってしまおうとも申せましょう。

もとよりキリスト教の神学においては、神は天地創造の主にして全智全能なる超在的絶対者とされており、神の子イエスの存在もまた、これに準ずるものとされています。父なる神と、神の子イエス、そして聖霊、というこの三者は、本質的に一体であるという「三位一体説」が即ちそれです。

まず神があつた、神は天地を創造し、萬物を支配し、神の子を地上へ送った、イエスは生まれながらの神の子であつたという、こうした形而上的

立場に立てば、イエスの人間的な内省苦悩というものも、却って取り扱い難い問題となるのも、蓋し当然のことでありましょう。

最近の神学の間では、歴史上の人間イエスと、信仰上の形而上的イエスとを峻別し、史上のイエスよりも形而上のイエスを主体として、たとい史上のイエスの存在が否定されても、キリスト教の信仰は揺らぐものではない、という学説も起こっているようです。然し史上のイエスをぬきにして、どうして形而上のイエスの存在がありましょう。それは、そういう人々の学説であつて、イエスそのものとは言い難いのではないのでしょうか。

イエスが、神の子としての自覚の中にあつて、人間的に苦悩したことは事実です。若しも、この自覚がなかったならば、その苦悩も起こるはずはなかつたことでしょう。またその苦悩がなければ、神の沈黙の真意を知って十字架につくこともなかつたことでしょう。自覚あつての苦悩、苦悩あつての自覚、自覚と苦悩は共にあつたのです。

確かにゲッセマネの園においては、三度目の苦
禱の折り、イエスの苦悩は、陽光をあびた草露の
ように消えています。然し消えたということは無
くなったというのではありません。事実その苦悩
の消えると同時に、自分一人の苦悩に代わって、
人類一切の苦悩を背負うという重荷が課せられる
に至っているのです。従って苦悩の内容は如何に
違つても、人間性のないイエスはありえない、と
いうことが出来るのではないのでしょうか。

申すまでもなくユダヤのイエスを、世界のイエ
スへと発展せしめる端緒を開いたのはパウロでし
た。パウロをはじめとするキリスト教神学では、
十字架や復活を時点として、ますますイエスを形
而上の存在へと神格化して来ました。然しその発
想が、イエスの神の子としてふさわしい部分のみ
を抽出したものであるならば、イエスを如何に超
人的存在として神格化しようとも、それも、そう
いう人々によって作り出されたイエスであつて、
真実のイエスとはいえないのではないのでしょうか。

若し十字架上のイエスが、三十三年の生涯を凝
結したものであり、そのイエスを形而上的存在と
して神格化するならば、その存在には、既に人間
的苦悩も共に内在していることになりはしないで
しょうか。

少なくとも超人的存在としての神の子イエスの
中に、人間的苦悩が起きて来たった原理を見出す
と共に、人間的存在としての人の子イエスの中に、
神の子としての自覚の起きて来たった原理を見出
す以外に、イエスの両極矛盾した人間像を理解し
得る道は、開けてこないのではないでしょう。

〈付記〉イエスの両極矛盾を述べるに当たつ
て、イエスの苦悩の説明が長きに亘り、さな
がらイエス伝の紹介といった形となつたまま、
予定の紙数も遙かに超過してしまい「イエス
と日蓮聖人の対比」特に十字架によつてイエ
スの伝道が完結しているのに対し、日蓮聖人
の伝道は、そこより始まっていることを述べ
る機会を逸し、心残りがしますが、それはま
た後日を期したいと思ひます。 〈以下次号〉